

たすかり候べきと申ければ、上人あはれみでの給はく、げにもさやうにて世をわたり給らん、罪障まことにかるからざれば、酬報またはかりがたし、もしか、らすして、世をわたり給ぬべきはかりごとあらば、すみやかにそのわざをすて給べし、もし餘のはかりごともなく、又身命をかへりみざるほどの道心、いまだおこりたまはずば、たゞそのまゝ、にてもはら念佛すべし、彌陀如來は、さやうなる罪人のためにこそ、弘誓をもたてたまへる事にて侍れ、たゞふかく本願をたのみて、あへて卑下する事なかれ、本願を憑て念佛せば、往生うたがひあるまじきよし、ねんごろにをしへ給ければ、遊女隨喜の涙をながしけり、のちに上人の給けるは、この遊女信心堅固なり、さだめて往生をとぐべしと、歸洛のときこゝにてたづね給ければ、上人の御教訓をうけたまはりてのちは、このあたりちかき山里にすみて、一すぢに念佛し侍しが、いくほどなくて、臨終正念にして、往生をとげ侍きと、人申ければ、玄つらん／＼とぞおほせられける。

〔發心集 六〕室の泊の遊君鄭曲を吟じて上人に結縁する事

中ごろ、少將ひじりといふ人ありけり、事のたよりありて、はりまのくにむろといふところにとまりたりける夜、月くまなくて、いとおもしろかりけるに、遊君我も／＼とうたひゆき、ちかうあはれなるもの、さまかなとみる程に、遊女の舟このひじりののりたる舟をさして、こぎよせければ、かんどりやうの者、いなやこれは僧の御舟なり、思ひたがへ給へるか、と、事の外にいふ、さみたてまつる、何とてかはさるひがめはみる物かはといひて、つゞみうちて、

くらしよりくらしき道にぞ入ぬべきはるかにてらせ山のはの月、と此うたを二三返ばかりうたひて、かゝるつみふかき身となれるも、さるべきむくい侍るべし、この世は夢にてやみなんとす、かならずすくひ給ひなん、こゝろばかりえんをむすびたてまつるなりといひて、こぎはなれにけり、思はずあはれにおぼえて、なみだをおとしたりと、後に人にかたりけり。